



Title	倶舎論註釈書「真実義」の梵文写本とその周辺
Author(s)	松田, 和信
Citation	インド哲学仏教学論集, 2, 1-21
Issue Date	2014-10-31
DOI	10.14943/hjiphb.2.1
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/62131">http://hdl.handle.net/2115/62131</a>
Type	bulletin (article)
File Information	02_01_matsuda.pdf



[Instructions for use](#)

## 俱舎論註釈書「真実義」の梵文写本とその周辺

松 田 和 信

### アビダルマディーパの著者

昨年（2012年）の11月23日、大谷大学で開かれた独ハンブルク大学のランベルト・シュミットハウゼン（Lambert Schmithausen）教授の講演会に参加した後の、懇親会の席でのことであった<sup>1</sup>。龍谷大学に招待されて、三か月の予定で京都に滞在中の、中国チベット学研究中心（中国蔵学研究中心、以下「蔵学中心」と略）に勤務する李学竹（Li Xuezhu）博士が思いも寄らぬことを筆者に言い出した。「先生はイーシュヴァラって知っていますか。アビダルマディーパの写本に著者はイーシュヴァラだとはっきり書いてあるのです」「えっ、イーシュヴァラ？」これが、筆者にとって、想像が確信に変わった瞬間であった。1959年、P. S. ジャイニによって、ラーフラ・サーンクリトヤーヤナが撮影した不完全な写本写真に基づいて出版された『アビダルマディーパ (Abhidharmadīpa)』は<sup>2</sup>、その内容から説一切有部教団のアビダルマ研究にとって極めて重要な文献であるにもかかわらず、漢訳もチベット語訳も存在せず、さらにサーンクリトヤーヤナの写本写真にはコロフォンを記した最終フォリオ（葉）が含まれていないため、その著者も、著わされた年代も長い間不明のままであった<sup>3</sup>。従って、説一切有

---

1. 「アーラヤ識の起源に関するいくつかの見解 (Some Remarks on the Origin of Ālayavijñāna)」と題した英語による講演であった。本稿とは直接の関係はないが、シュミットハウゼン教授に捧げる巨大な記念論文集が最近刊行されたこともニュースとして記しておきたい。The Foundation for Yoga Practitioners; The Buddhist Yogācārabhūmi Treatise and Its Adaptation in India, East Asia, and Tibet (Harvard Oriental Series, No. 75), ed. by Ulrich Timme Kragh, Cambridge and London 2013, 1429 pp.

2. Jaini 1959. 1977年に第二版が出版されたが、写真版による再版ではなく、デーヴァナーガリーの活字を組み替えて出版されたため、行のレイアウト等が1959年の初版と同じではない。はるかに質が低下している。必ず初版を使用すべきである。同じことは『俱舎論』のプラダン本についても言える。

3. ただし現在では三友健容博士によるジャイニ出版部分の全訳研究（三友健容 2007）が公刊されたことによって、以前に較べて随分と近づきやすい文献になったように思う。三友博士に感謝したい。

部教団におけるアビダルマ研究の歴史的展開の上でどのように位置づけてよい文献であるのか、客観的証拠を得ることができないまま現在に至っていた。ただ、これまで一部の研究者は、玄奘三蔵(602-664)の見聞録に基づく弁機の『大唐西域記』における、カシュミールに近いガンダーラ国のある仏教伽藍の条に見られる「昔ここで伊濕伐邏(イーシュヴァラ)論師が阿毘達磨明燈論を著した」(大正 2087, 51巻881b)との記述を基に、同論のタイトルとの関連性を想像してはいた<sup>4</sup>。しかし李博士の情報によって、初めて『大唐西域記』の記述と写本のそれが一致したのである。

ジャイニの出版は(以下「ジャイニ本」と略)、同論のテキスト全体の半分弱を含むと推定されるが、10世紀前後のカシュミールのシャーラダー体に似た文字で大きな貝葉に書写された写本のうち、ジャイニ本に欠く残りの部分は失われてしまったわけではなかった。事情は不明であるが、いずれかの時点で貝葉写本の束がばらばらになって二つに分割され、一方はチベットのシャルの僧院に保存され、それがサンスクリットヤーナに撮影されてジャイニ本の底本となり、一方はラサのポタラ宮に移されて生き残っていたのである。1980年代にポタラ宮、および同じラサのノル布林カ宮に保存されていた2000点以上の梵文写本を調査した中国社会科学院の羅焯(Luo Zhao)教授によって写本目録が編纂され、その中から650点ほどの貝葉写本が写真撮影されたが、それらの写真は現在蔵学中心に所蔵されている。羅焯博士の目録と、蔵学中心の桑徳(*Sang De*)博士の作成した所蔵写真に対する目録の記述から、ジャイニ本に含まれない部分の写本も存在することが想像されていた<sup>5</sup>。しかし現在までそれを確認する術はなかった。今回李博士の研究によってそれが初めて確認されたのである。ただし、コロフォンのある最終フォリオはすでに失われたようで、蔵学中心の写真に含まれる、新たな64葉の中にも見い出せないという。では著者名はどこに記されていたのか。実はそれはジャイニ本には含まれない第1章第1節末尾のコロフォンだという。

『アビダルマディーパ』は、『俱舎論』の組織を踏襲する形で8つの章(adhyāya)よりなり、各章がさらにいくつかの節(pāda)に分けられている。写本

---

4. 著者についてこれまでの説を網羅した三友健容 2007, pp. 32-44 参照。

5. 写本目録の書誌情報については本稿巻末を参照。この中の羅焯目録の編纂については、Steinkellner 2009に含まれる羅焯博士の報告を参照。筆者による和訳もある(松田 2008)。

は同論の偈をすべて含む、著者不明の散文註釈書を書写したものである。その第1章第1節のコロフォン（写本では第20葉の表8行目）に次のように記されている。

ācāryeśvaroparacite abhidharmapradīpe vibhāṣāprabhāyām vṛttau prathamasyādhyāyasya rūpaskandhavibhāgo nāma prathamah pādaḥ samāptaḥ ||

アーチャールヤ・イーシュヴァラ (ācārya-Īśvara, イーシュヴァラ論師) によって著された『アビダルマ〔プラ〕ディーパ (Abhidharma-pradīpa)』に対する「毘婆沙の輝きを有する (Vibhāṣāprabhā)」註釈 (vṛtti) の中、「色蘊の分析 (rūpaskandhavibhāga)」と題する第1章の第1節終わり。

ジャイ二本では第1葉の次は第31葉である。つまり第2葉から第30葉までの文章は含まれていない。李博士の調査によってこれら失われたと思われていた部分が存在することが明らかになったのである。筆者は李博士の御厚意によって博士の暫定的なローマ字転写を見せていただき、高野山大学の加納和雄氏（現在同大学准教授）を誘って、昨年未より李博士が帰国される本年1月末まで、数度に亘って李博士のローマ字転写を検討する機会を持った。限られた時間であったが、検討できたのは、ジャイ二本に欠く第2葉の初めから本文の始まる第1章第18偈（第3葉の裏9行目）のあたりまでであった。『アビダルマディーパ』は第1偈（この偈はジャイ二本に含まれる）より第17偈までが「造論の意趣」等を記した序偈で、第18偈になってやっと全存在を五蘊と三無為の八句義 (padārtha) に分けることを定義する本文が始まる。『俱舍論』に比べて、序も詳細で相当の長文である。無論これらはジャイ二本では第1葉のその部分以外は存在しない。上記第1章第1節のコロフォンは、八句義の第1項である色蘊の説明がそこまで、つまり第20葉の表8行目まで続くことを意味している。色について、さらには五蘊全体について記す、説一切有部教団の長編文献を我々は手にしたとも言えよう。

ところで、ジャイ二本に含まれる各章・各節の末尾にもコロフォンは現れるが、そこでは著者への言及は全く見られない。恐らく写本の書写生は、第1章第1節のコロフォンでこのようにイーシュヴァラと著者名を記し、これより後のコロフォンでは省略したのであろう。ただし、もし失われた最終フォリオが残っていたなら、そこでは再び著者名と、さらに詳しい情報が記されていたであろうことは想像に難くない。さらに、このコロフォンは著者名以外にも重要な情報を与えてくれる。つまりコロフォンを素直に理解すれば、『アビダルマ〔プラ〕ディーパ』と

は、偈の部分だけを示すタイトルであって、その著者がイーシュヴァラであり、散文の註釈 (*Vibhāṣāprabhā vṛttih*) については、著者が同一人物であるかどうかは何も書かれていないということである。最終フォリオにはそれが記されていたかもしれないが、残念ながら註釈の著者をどう理解したら良いかは今なお不明である。『大唐西域記』の記述から、偈によるイーシュヴァラの著述が玄奘三蔵より前であったことは確実であろうが、散文の註釈については何とも言えない。このコロフォンから、筆者には『俱舎論』の偈と註釈のように同一人物の手になるとは思えない。さらに偈数について、ジャイ二本には597偈が含まれるが<sup>6</sup>、全体では果たして何偈になるのか、李博士の今後の分析を俟たねばならないが、恐らく1200偈を優に超えると思われる。偈だけでも巨大なアビダルマ論書であったのである。

なお李博士は、このコロフォンを含む、現時点で博士が写本から読み取った情報を、刊行されたばかりの蔵学中心の英文雑誌に収められた論文の中で書いているので参照していただきたい<sup>7</sup>。ここで筆者が述べたことは、李博士の論文の内容に、博士より直接聞いたことも多少加えて日本の読者のために紹介したものである。さらに李博士の論文には書かれていないが、ローマ字転写を検討して気づいた興味深い点は、イーシュヴァラがヴァスバンドウ (*Vasubandhu* 世親) への対抗意識をむき出しにしていることである。造論の意趣の項でイーシュヴァラは「悪見 (*kudṛṣṭi*) という眼病の闇 (*timirāndha*) を有し、誤った道 (*asanmārga*) に寄りかかる人々に対して、正しい道 (*satpatha*) を照らすために、私によってこの灯 (*dīpa*) が点される」(第10偈)と述べた後、「俱舎論作者 (*Kośakāra*) の徒勞 (*śrama*) がこの〔灯〕によって観察されるべし」(第13偈後半)と述べ、さらに「論理 (*tarka*) と聖典 (*āgama*) の明瞭な火焰 (*arcis*) を有するアビダルマの灯火 (*Abhidharmapradīpa*) によって、あたかも干し草 (*śuṣkakakṣa*) が燃やされるように、かの俱舎論 (*Kośa*) が燃やされることを汝は見るべし」(第14偈)とまで述べている<sup>8</sup>。著者のイーシュヴァラにとって、『アビダルマディーパ』の表

6. ジャイ二本の偈番号は、半分弱ほどの写本から回収された偈に対する単なる通し番号であって、実際の『アビダルマディーパ』の上で、例えばジャイ二本の第1偈に第2偈が続くわけではない。

7. Li Xuezhong 2012b. これが実際に刊行されて掲載誌が筆者に届いたのは本年4月下旬であった。

8. ここで和訳した箇所の梵文テキストについては、次稿あるいは次の学会発表で李博士によって提示されるであろう。

題における「ディーパ」は、正しい道を照らす照明であると同時に、『俱舎論』を焼く論理の炎でもあったのである。ただ、その企てが成功したかどうかは、その後の仏教史を見れば明らかなことのようにも思える。『俱舎論』は仏教世界の必読書とされて、その影響は我が国にまで及んだが、『アビダルマディーパ』は忘れ去られ、20世紀になるまでチベットの僧院に埋もれていたのである。

なお、ここで紹介した序偈の中で、「ディーパ」(10偈)と「プラディーパ」(14偈)の語は区別なく用いられているように見える。無論韻律上の問題も考慮する必要があるが、先のコロフォンでは「アビダルマプラディーパ」と記されていた。しかし、筆者が目を通した散文註釈部分で、タイトルに言及する時はすべて「アビダルマディーパ」が用いられる。また写本の各フォリオ表面の左欄外には、abhi pra vṛ の文字が縦に記されている<sup>9</sup>。これは、Abhi(dharma-)pra(dīpa)vṛ(tti)の省略であろう。正確に言うと、本写本は『アビダルマディーパ』の写本ではなく、その註釈書(vṛtti)の写本だからである。ジャイ二本と李博士の論文が紹介するように、他の章、節のコロフォンでは、単に「ディーパ」とする場合も多いが、書写生には、本論のタイトルが「アビダルマプラディーパ」と伝承されていた可能性が高い。しかし散文註釈では「ディーパ」だけが認められるので、本来のタイトルは「ディーパ」の方が良いのかもしれない。ただ、論典のタイトルとしては「プラディーパ」の方が一般的であるとも思われ、この問題についてはそう簡単に結論を出すことはできない。

一点さらにつけ足しておきたい。ドイツ探検隊が将来したトルファン写本コレクションの中から、榎本文雄教授によって、註釈を含む『アビダルマディーパ』の写本断簡類が発見されている<sup>10</sup>。その中、ジャイ二本に対応箇所の見い出されない断簡も、李博士の御教授によると、蔵学中心の写本写真の中にそのまま平行箇所が確認されるという。これは紙写本であり、文字も北トルキスタンブーフミーのタイプbであるから、インドからの輸入写本ではない。トルファンで書写された写本である。ガンダーラで著されてトルファンに伝えられる時間も考慮すれば、この発見によって、外面的には、広瀬智一博士の言うような<sup>11</sup>、註釈を

9. 三友博士は abhi praṣṭha と読んで考察を加えている。三友健容 2007、28頁。

10. 榎本文雄 1988。これは『トルファン出土梵文写本カタログ (*Sanskriithandschriften aus den Turfanfunden*)』第7巻(1995)に登録されている Nr. 1705 + 1730の登録番号の断簡類。その後出版されたカタログ第8巻以降を見ると(現在第11巻 2012 まで刊行済)、さらに多くの『アビダルマディーパ』の断簡が見い出されていることが知られる。

11. 広瀬智一 1983、(98)頁。

含めて700-800年以降という年代設定は再考を要するのではなかろうか。『大唐西域記』が「昔」と記していることから、この時代、中国で「昔」という字がいかほどの時間のイメージを表したか筆者は知らないが、少なくとも、偈による『アビダルマディーパ』が玄奘三蔵より相当以前にイーシュヴァラによって著され、玄奘来訪時にもその傳承が当地に残り、さらに註釈文も含んでトルファンから多くの断簡が発見されていることも考えあわせると、説一切有部教団のアビダルマ文献の歴史の上に位置づけられて、漢訳されなかったとはいえ、インドと中央アジアの仏教世界である程度流通した論典であったことだけは間違いないのではないか<sup>12</sup>。李博士によって新たなテキストが一刻も早く出版されることを願ってやまない<sup>13</sup>。

## 写本研究の時代

本題に入る前に、周辺情報に触れているうちに相当の紙幅を費やしてしまった。はっきり覚えていないが、15年ほど前、ノルウェーのオスロでのことであったと思う。スコイエン・コレクションのガンダーラ語仏教写本を入れたファイルの前に、米ワシントン大学のリチャード・サロモン (Richard Salomon) 教授が筆者に漏らした一言がある。「我々は今大変な時代に生きている」と。1990年代の後半から次々と現れたアフガニスタンとパキスタン出土写本が話題を呼んでいる頃であった。ここで出土写本と言ったが、梵文写本を中心とする現存のインド語仏教写本を眺めれば、仏教写本は二種に分けて考える必要があろう。遺跡から

---

12. アビダルマ論書でダルマを八句義に分ける文献は『入阿毘達磨論』であるが、『アビダルマディーパ』の序の部分(序偈)と『入阿毘達磨論』における仏法僧への3偈の帰敬偈(桜部建 1997、191頁)には、内容的に何らかの関係があるように思える。特に、第3偈(僧としてのアビダルマ論師に対する帰敬偈)と『アビダルマディーパ』の作者の關係に注目すべきであろう。そこには「灯明を作る者」との言葉も見える。吉本信行博士も同じ指摘をした上で、『入阿毘達磨論』(玄奘訳)が『アビダルマディーパ』に先行する可能性を示しているが(吉本信行 1982、55-57頁)、『アビダルマディーパ』が玄奘三蔵より相当古い時代の論典であることが確実となり、論の骨格が八句義にあることが明らかになったことで、その逆もありえるのではないかと筆者には思える。つまり、俱舎論 アビダルマディーパ 入阿毘達磨論 玄奘三蔵という順序である。ただし、これはこの1点からだけの筆者の推測に過ぎず、論全体を分析した上でないと簡単に結論を出せる問題ではないことは十分承知している。

13. 李博士はこれ以外に現在『入中論』『阿毘達磨集論』『阿毘達磨雜集論』の写本研究にも携わっている。Li Xuezhong 2012a, 2012c, 2013 参照。さらにアバヤーカラグプタの *Munimatālaṅkāra* の梵文写本も解説されているが、蔵学中心の英文雑誌次号に最初の紹介論文が掲載されると聞いている。

発見される出土写本と、寺院やライブラリーに伝えられる伝世写本である。同じ写本とはいっても、両者には明らかな違いがある。伝世写本には完全な写本が多いが、書写年代は新しい。10世紀より前に書写されたと思われる写本は少数である。それに対して、ギルギット写本や中央アジア写本の一部を除いて、出土写本の大部分は断簡にすぎない。しかし書写された年代は圧倒的に古い。写本はその性格上、書写されていくうちに誤写が起こり、余計な要素が紛れ込んでゆく運命から逃れることはできないであろう。従って、たとえ小さな断簡であっても出土写本の持つ価値は高い。しかし伝世写本の価値は別な意味で高い。たとえ近代の写本であっても、インド語テキストの原典をまとめて回収できる可能性があるからである。従って、最も価値のある写本は、一葉の欠落も見られず、完全に保存された伝世写本で、かつ出土写本と同様の年代を持つ写本ということになるが、そのような写本は例外的である<sup>14</sup>。

ところで出土写本については、前世紀初頭の中央アジア探検の時代を経て、1931年のギルギット写本の発見をもってほぼ写本発見の時代は終わったと思われていた。しかし1990年代の中頃から、パキスタンとアフガニスタンから発見された新たな出土写本類は、紀元1世紀に遡るガンダーラ語の写本を含んで学界に衝撃を与えた<sup>15</sup>、伝世写本についても、現在は、チベットに伝承された大量の写本を保存する中国が徐々に研究者に門戸を開きつつある。手を尽くさずすれば、何らかの形で写本研究に携わることのできる、新たな、しかも大変な時代を迎えているとも言える。筆者もこの15年ほどの間は、ヨーロッパの研究者たちと共同でアフガニスタンとパキスタン出土写本の解読に携わりと共に、一方で筆者の関心から、唯識文献とアビダルマ文献を中心に、関連する伝世写本にも注意を払ってきた。そのような中で、この数年の間に筆者の目を急速に開かせてくれたのがチベットに残る写本類である。チベットの梵文写本については情報も少なく、一体どれだけの写本が保存されているのか数年前までは判然としなかった。それがこの数年、蔵学中心や北京大学、さらには写本の

14. その例外的なものとして、カトマンズの国立公文書館に保存されている、東方系のグプタ・ブラーフミー文字によって書写された、6-7世紀に遡る『十地経』の貝葉写本を挙げるができるが、この写本も数葉が欠落している。ただこれが知られている写本の中では、最古の伝世写本であることは間違いのないであろう。Matsuda 1996, 松田 2011, 127-129頁参照。

15. 出土写本の概略については、松田 2010b参照。



修復に携わるラサでも写本研究を志す研究者や修復の専門家が次々と育つて、国内外で彼らの研究発表に接する機会も増え、さらに彼らとの直接的な交流や、彼らの属する研究機関との交流を通して、さらに上述の写本目録を閲覧することも可能となる中で、やっとチベットに伝えられた梵文写本の状況も明らかとなってきた<sup>16</sup>。さらに最近の情報では、6年間の予定でラサで行われていた写本修復の事業が今年の夏に終了し、写本の影印版60巻と目録4巻が、ごく少数ではあるが公刊されたという<sup>17</sup>。ただし、それらは一般に販売されたものではなく、中国国内でも研究者が閲覧できる状況にはいまだ至っていないようである。蔵学中心の李博士による『アビダルマディーパ』にかんする写本情報も、これら一連の経緯の中から筆者にもたらされた話のひとつであった。

### スティラマティのアビダルマ註釈書二種

さてこのような状況に至る最も劇的な貢献をされた研究者がウィーン大学のエルンスト・シュタインケルナー (Ernst Steinkellner) 教授とその門下生たちであったことは言を俟たない<sup>18</sup>。シュタインケルナー教授の尽力により、蔵学中心とオーストリア科学アカデミーとの間で初めて国際共同研究のための協定が結ばれ、その成果が次々と出版されつつあることはすでに広く知られていることであろう<sup>19</sup>。その後、同様の協定はハンプルク大学 (Harunaga Isaacson ハルナガ・アイザクソン教授) や龍谷大学 (桂紹隆教授) との間でも結ばれて研究プロジェクトが進行中である。ところで筆者にとってだけでなく、アビダルマや唯識文献研究の盛んな日本の研究者にとって注目すべきは、共同研究の開始に当たって、オーストリア科学アカデミーの側が取り上げた写本類の中に、スティラマテ

---

16. この数年の情報をまとめたものに、Krasser 2013, Luo Hong 2013, Saerji 2013参照。これらの論攷を含む、仏教写本学会報告論文集(2009年、米スタンフォード大学で開催)は現時点では未刊であるが、2013度中にウィーンのオーストリア科学アカデミー出版局より刊行される。なお2008年時点での情報については Steinkellner 2009に含まれる各論攷を参照。

17. 影印版が映し出される複数のニュースレポートを中国中央電視台(CCTV)のサイトから見るができる。

18. Steinkellner 2009に含まれるシュタインケルナー教授の報告、さらにSteinkellner 2004など参照。

19. Luo Hong 2013, 松田 2011参照。STTA Series (*Sanskrit Texts from the Tibetan Autonomous Region*) は現在14巻まで刊行されている。ただし、第9、12、13巻は未刊。

イ (Sthiramati) によって著わされたアビダルマ註釈書が2点含まれていたことであつた。それがヴァスバンドゥの『俱舎論』と『五蘊論』に対する註釈書である。ただ、『五蘊論』は識蘊の本体をアーラヤ識と見なすことから、説一切有部教団のアビダルマ文献というわけではないが、浩瀚な『瑜伽師地論』におけるアビダルマ的記述を短編にまとめ直した瑜伽行派のアビダルマ・テキストと見なして差し支えないであろう<sup>20</sup>。なおこれら2点は中国側あるいはウィーン側の研究者によって新たに発見、同定された写本というわけではなく、上述の写本目録にすでに登録されていた写本であつた。その後、シュタインケルナー教授によって、2種の写本のうち、五蘊論註釈書の解読と出版はミュンヘン大学のヨヴィタ・クラマー (Jowita Kramer) 博士に委託され<sup>21</sup>、俱舎論註釈書は大谷大学の小谷信千代教授 (現在名誉教授) に託された。小谷教授がシュタインケルナー教授と正式な覚え書きを交わして写本写真を受け取つたのは2005年の夏であつたと聞いている。その後、小谷教授によって筆者を含む京都在住の研究者が集められ、2006年の春より写本解読のための公開研究会が大谷大学を会場に定期的に開かれて現在に至っている。なお現在は、筆者の名前も共同研究を紹介するウィーン側のウェブ上に示されているが<sup>22</sup>、研究の出発時は、筆者にとって先輩であり40年来の友人でもある小谷教授が一人でシュタインケルナー教授より引き受けた研究プロジェクトであつたことは明記しておきたい。研究会が開始されてすでに7年が経過したが、残念なことに、我々が読み終えたのは第1章「界品」の半分程度にすぎない<sup>23</sup>。スティラマティの註釈は巨大であり、筆者の推定では、総文章量はヤショーミトラ疏の二倍はあるはずである。特に第1章は長い。最初の章でもあり、スティラマティにも力が入っているのであろう。2013年4月現在、研究会に参加している研究者は、佛教大学の本庄良文、京

---

20. これは筆者の意見ではなく、五蘊論註釈書の冒頭でスティラマティ自身が書いていることである。梵文テキストは Kramer forthcoming B に含まれる。

21. クラマー博士による五蘊論註釈書の原稿はすでに完成して、近々 *STTA Series* より刊行される (Kramer forthcoming B)。なお同博士はこの写本に基づく論考をすでに数篇発表している (Kramer 2008, 2012, 2013, forthcoming A)。なお、松田 2010a は、クラマー博士の校訂テキストに基づいて、識蘊におけるアーラヤ識の存在論証を出版に先駆けて和訳したものである。

22. [http://www.ikga.oeaw.ac.at/Abhidharma\\_texts](http://www.ikga.oeaw.ac.at/Abhidharma_texts) さらに Krasser 2013 にも同様の記載がある。

23. 解読が終わった一部については、未刊のテキストに基づいた和訳が研究会参加者の連名で発表されている。小谷信千代 (他) 2009, 2012.

都女子大学の秋本勝、高野山大学の加納和雄、龍谷大学の那須良彦と青原令知、同朋大学の福田琢、大谷大学の箕浦昭雄、上野牧生、松下俊英の各氏である。以下に、スティラマティによる註釈書写本の書誌情報、および、これまでの解説の結果、筆者が知り得た点をいくつか紹介しておくことにしたい。

### 梵文写本「真実義」の書誌

スティラマティの俱舎論註釈書のタイトルは「真実義 (*Tattvārthā*)」という。以下に紹介する写本のコロフォンに基づく「真実義を有する俱舎論の註釈 (*Tattvārthā Kośaṭīkā*)」となるのか。敦煌から回収された漢訳抄本では『実義疏』(大正1561)と訳されている(以下本稿では「真実義」を用いる)。真実義の梵文写本は、羅焯博士の写本目録では、ポタラ宮に保存されている貝葉写本の項の、論典部門の34号とされる写本である。この写本はひとつの写本ではなく、二つの貝葉写本の束よりなる。一つの束 (*bundle*) は58葉 (58 folios)、もう一つの束は79葉 (79 folios) を含み、合計137葉より構成されている。羅焯目録によると、各フォリオのサイズは横54.3cm、縦6.6cmの横長の巨大な写本である。ただし縦6.6cmというのは、恐らく平均のサイズであって、実際のサイズはフォリオ毎に異なる。従って、行数も一様でなく、一葉の片面8行ないし、多い行で14行も書かれている。一葉の両面で、対応するチベット語訳の3ないし4葉程度(表裏合計で6-8面)をカバーすると言えばその大きさを想像していただけるであろうか。また書写に用いられた文字の書体 (*script*) は、現在ではギルギット写本の *Gilgit/Bamiyān Type 2* と呼ばれている書体とほぼ同じで、日本に伝えられた悉曇文字とも共通する。文字について注目すべきは、例えば子音の *ya* は、チベット文字と同じようなグプタ・ブラーフミー (*Gupta Brāhmī*) 書体の *ya* と、ナーガリー (*Nāgarī*) 書体や現代のデーヴァナーガリー書体の *ya* がランダムに使われている点である。一つの単語の中に *ya* の字が2つある時に、一方はグプタ・ブラーフミーの *ya*、もう一方はナーガリーの *ya* という例も見られる。これは、書体がグプタ・ブラーフミーからナーガリーへと移り変わって行く変遷期に書写された写本であることを物語っているように思われる<sup>24</sup>。書体から判断して、この

24. 他の写本と同様、この写本でも *dharma* が *dharmma*、*tattva* が *tatva* 等の書写生の書き癖は普通に見られる。さらに、古い写本に特徴的な点として、*ダンダ*と*アヴァグラハ*はほとんど書かれていない。ヴィラーマで終わる場合を除いて、*ダンダ*は我々の判断で入れる以外に方法はない。なお本稿で写本を引用する場合には、*ダンダ*を補足する以外、これらを正規形には訂正しない。

写本が、紀元8世紀から9世紀にかけて北インドで書写された写本であることは  
 確実であろう。つまり、著者スティラマティの時代からそう遠く隔たっていない、  
 チベットに残る最も古い梵文写本の一つであると思われる。

また残念なことであるが、この写本は真実義全体の完全な写本ではない。我々  
 の判断では、本来真実義は三つの貝葉の束に分けて書写されていた。我々  
 はそれを、Bundle A, B, Cと仮に名付けることにした。しかし、三つの束のうち、  
 2番目のBが失われて、AとCの2束が残った写本なのである。従って全体の三  
 分の一は失われていることになる。三つの束がカバーする『俱舍論』の本文を  
 プラダン本 (1967年初版本) で示せば次の通りである。

A: 58葉 Pradhan first ed., pp. 1-56 (第1章界品より第2章根品の中程まで)

B: 欠落 (missing)

C: 79葉 Pradhan first ed., pp. 219-460 (第4章業品の中程より第8章定品の終  
 わりまで)

つまり、Bの束に書かれていたはずのプラダン本57頁から218頁までに対する  
 註釈文は失われて存在しない。なおAとBの束は完全で、この2束の中で失われ  
 たフォリオはない<sup>25</sup>。次に、残された2束から回収される各章のコロフォンを以  
 下に示そう。

第1章「界品 (*Dhātunirdeśa*)」 Bundle A, 45v6-7

|| ācāryabhadantasthīramatyuparacitāyāṃ prathamam kośasthānam samāptam\*||

\*\*\*第2章と第3章のコロフォンは Bundle Bに含まれるため散逸\*\*\*

第4章「業品 (*Karmanirdeśa*)」 Bundle C, 14r9

|| ācāryasthīramatyuparacitāyāṃ tatvārthāyāṃ vyākhyānataś caturtham  
 kośasthānam samāptam ||

第5章「随眠品 (*Anuśāyanirdeśa*)」 Bundle C, 35r14

|| ācāryabhadantasthīramatyuparacitāyāṃ tatvārthāyāṃ kośāṭīkāyā{mā}ṃ  
 pañcamam kośasthānam samāptam ||

第6章「賢聖品 (*Mārgapudgalanirdeśa*)」 Bundle C, 56v4

|| ācāryabhadantasthīramatyuparacitāyāṃ tatvārthāyāṃ kośāṭīkāyāṃ< s/i>

---

25. AとBのフォリオのフォーマットには若干の相違がある。どちらも左右に二つの綴じ穴  
 があるが、Aでは綴じ穴の上下に文字は書かれていないが、Bでは綴じ穴の周りにもびっ  
 しりと文字が書かれている。従って、書体とフォリオ・サイズは両方とも同じであるが、Bの  
 方がフォリオの文字量は多い。

vyākhyānataḥ ṣaṣṭhaṃ kośasthānaṃ samāptaṃ ||

第7章「智品 (*Jñānanirdeśa*)」 Bundle C, 69v2

|| ācāryasthīramatyuparacitāyāṃ vyākhyānataḥ saptaṃ kośasthānaṃ ||

第8章「定品 (*Samāpattinirdeśa*)」 Bundle C, 79v12

|| ācāryabhadantasthīramatikṛtāyāṃ kośaṭīkyāṃ < s/ > vyākhyānato 'ṣṭamaṃ  
kośasthānaṃ samāptaṃ samāptā ca tatvārthā nāma kośaṭīkā ||

回収される6つの章のコロフォンいずれにもスティラマティの著作であることが明記されている。最終第8章のコロフォンに続いて、真実義全体のコロフォン (samāptā ca tatvārthā nāma kośaṭīkā) が現れて写本は終わる。書写生や書写年代、あるいは祈願文等は書かれていない。また、この写本は、真実義のチベット語訳と同様、『俱舎論』の末尾に付された「破我品」に対する註釈文は含まれていない。これは、本写本とチベット語訳が破我品の註釈を欠いているということではなく、スティラマティ自身が破我品の註釈を著さなかった、あるいは彼の時代に破我品は『俱舎論』に含まれていなかったということであろう。

次に、故江島江教博士によって紹介されている、本写本にもかかわる重要な情報について述べておきたい。真実義のチベット語訳のコロフォンによると、チベット語訳は15-16世紀の非常に遅い時代の翻訳であり、そのためかチベット大蔵経で真実義はアビダルマ部ではなく、雑部に収められている。さらに江島教授の紹介するチベット語訳のコロフォンによると<sup>26</sup>、翻訳に際して、主写本と対校用の写本の、2種の写本が使用されたという。しかも、主写本に対する、対校用の写本は第2章「根品」の中程から第4章「業品」の中程までを欠く不完全な写本であったという。これは、3つの束のうち、2番目のBの束を欠く本写本の状況と全く同じである。つまり我々が読んでいた写本は、チベット語訳に際して対校用に使われた写本そのものであった可能性が高い。なお現在、翻訳に使われた主写本は発見されていない。さらにチベット語訳以外に、敦煌で発見された漢訳抄本の断簡と<sup>27</sup>、同じ敦煌から発見されて最近公刊された漢訳第3巻<sup>28</sup>、

26. 江島恵教 1986, 6頁、23-24頁註4, P. ed., Otani No. 5875, Tho 56b4-565a8.

27. 漢訳抄本については櫻部建 1975に詳しい。

28. 蘇軍 1995. これは漢訳第3巻が丸ごと書写された巻物であるから、他の巻も存在したと想像できる。つまり、真実義全体が一度は漢訳された可能性がある。訳者は書かれていない。第3巻は第1章第20偈からの註釈文を含む。小谷教授によると訳文の上からはウイグル語訳と近い関係にあると見なされるという。それが事実であるなら、ウイグル語訳はこの漢訳(発見されたのは第3巻だけであるが)からの重訳ということになるのかもしれない。

さらに漢訳から重訳されたウイグル語訳の断簡<sup>29</sup>の存在することも知られている。

漢訳抄本とウイグル語訳から推定して、真実義の冒頭部には、スティラマティ自身の書いた帰敬偈と長文の序が存在した。ウイグル語訳の対応部分では、スティラマティの師がグナマティ (Guṇamati) であることが明言されている<sup>30</sup>。漢訳抄本にも帰敬偈は含まれるが、グナマティの名は言及されない。なお、ヤショーミトラ疏の帰敬偈では、グナマティとヴァスミトラ (Vasumitra) が『俱舍論』の註釈を著したことを述べる<sup>31</sup>。ところが、梵文写本とチベット語訳の冒頭部に帰敬偈と序は存在しない。直接、あるいは筆者の印象としては、突然第1章第1偈が引かれて注釈が始まる<sup>32</sup>。チベット語訳と梵文写本に一致して見られる異例な註釈開始をどのように理解したらよいであろうか。さらにチベット語訳では、翻訳を放棄して梵文をチベット文字で音写しただけの箇所が数多く現れる。これはチベット語訳者の能力不足であろうか。一般的にひどい翻訳であることは確かである<sup>33</sup>。ただ、これまでの研究会での経験からして、梵文写本のそれらの箇所は、現代の我々が読んでも、梵語として理解困難、あるいは意味不明の箇所が多かったことも確かである。梵文が写本に正しく書写されていなかった可能性も高い。しかし、チベット語訳にあたって2種の異なる梵文写本が使用されたはずである。なぜ翻訳が放棄されているのか。ふたつの写本で同一箇所が意味不明、あるいは理解困難であったのであろうか。このような疑問は、真実義の梵文写本の伝承を次のように推定すれば、解決がつくのではないかと筆者は考える。

29. 庄垣内正弘 2008. 註釈文冒頭部からの長文の断簡である。

30. 同上、167頁参照。

31. Wogihara 1932-1936, p. 1, / 11, Guṇamati-Vasumitr'ādyair vyākhyākāraiḥ...

32. 松濤泰雄 1995、宮下清輝 1991はチベット語訳冒頭部の和訳研究である。なお後者は科学研究費報告書であるので一般に公開されているものではない。

33. いちいち挙げればきりが無いが、難しいアピダルマの議論の部分ではなく、単純にして愉快的な誤訳を2点だけ指摘しておこう。(1) yas tūragaprabhṛtīnām (Ms. Bundle A, 26b5)

gañ shig ḥdod chags la sogs pa (Tib. P. ed., To 82a6), チベット語訳者は uraga (蛇) を rāga と読んだに違いない。(2) kasmād iti | (Ms. Bundle C, 38r5) las la sogs pa (Tib. P. ed., Tho 348a1), ここでは、訳者は kasmād iti を karmādi と読んだわけである。これまで研究者は、このような摩訶不思議な誤訳に満ちたチベット語訳を用いざるを得なかったが、梵文写本の存在によって今後の状況は変わって行くであろう。

オリジナル 第1葉が欠落 3束写本 第2束が欠落 本写本

3束写本の複写 チベット語訳主写本 (未発見)

筆者の推定はこうである。まず、伝承の出発点となるオリジナル写本から帰敬偈と序が書写されていた第1葉が失われ<sup>34</sup>、第1葉の失われた写本から、直接あるいはいくつかの写本を経て3束よりなる本写本が作成された。あるいはオリジナル写本と本写本は同じ写本であった、つまり3束写本こそオリジナルであった可能性も考えられなくはないが、本写本の束Aのフォリオ番号が1から付けられていること、さらに第1葉の裏面から文字が書かれていることからして、その可能性は低い。次に、3束とも残っていた写本から新たな複写が作られ、それがチベット語訳の主写本となった。さらに3束写本から束Bが失われて、チベット語訳の対校用の写本となった。それが本写本というわけである。このように考えると、チベット語訳に二つの写本が使われたといっても、元は一つの写本であり、第1葉が失われて、両方とも最初から帰敬偈と序がなかった、またチベット文字で音写されただけの箇所も3束写本以前の時点で、誤写があり、意味不明となっていたと考えれば、すべての疑問に説明がつくように思われる。無論、抄本と第3巻以外の大部分が失われた漢訳真実義 (実義疏) は、本来の第1葉を持つ完全な写本から翻訳されたということになるであろう。

### スティラマティがディグナーガの註釈書を書いた？

ここでこれまで読み終わった真実義の写本から得られる興味深い情報をひとつ紹介しておこう。まず問題部分の前後を含めて、該当箇所の梵文テキストを示すと次の通りである (Bandle A, 17v2-5)<sup>35</sup>。

apara āha | na rūpaprasādātmakaṃ cakṣurvijñānāśrayatvān mano(v3)vad iti<sup>36</sup>  
(l) atra tu Vaiśeṣikasya ataijasatvenāpi cakṣurvijñānāśrayatvasya prāptatvāt<sup>37</sup>

34. オリジナル写本で帰敬偈と序は第1葉の表面からでなく、裏面から書写されていたと考える。

35. サンディ規則は正規形に修正していないことを了解願いたい。

36. この文章(論証式)の主語は省略されているが、前文から判断して眼根 (cakṣurindriya) である。

37. vyāptatvāt と訂正して読むべきか。

tatsiddher iṣṭavighātakṛd viruddhaḥ (|) ataś ca hetur asiddhaḥ (|)  
 cakṣurvijñānasyānāśṛtatvā(d) dṛṣṭāntaś ca sādhanavikalāḥ (|) Kāpilyāpy  
 atriguṇatvenāpi hetur vyāpta iṣṭavighātakṛd viruddhaḥ (|) manas tu na  
triguṇam iti Pramānasamuccayopaniḥbandhād vijñeyam (|) tatra hi vista-(v4)  
rena pratipāditam (|) iha tu granthavistarabhayān nocyate (|) hetuś cāsiddhaḥ  
 vṛttivṛttimator ev' anyatvād<sup>38</sup> āśrayāśritānām hi bhedo dṛṣṭaḥ  
 kuṇḍabadarādīnām, na ca sa eva tasyaivāśrayo dṛṣṭa iṣṭo vā dṛṣṭānto 'pi  
 sādhanavikalāḥ (|) na hi cakṣurindriyavṛttir mana āśritya pravartate  
 Sāṃkhyasya (|) Bauddhasya tv abhyupetaḥ (|) sūtre bhagavatā  
 cakṣurādīnām rūpaprasā(v5)dātmakatvābhīdhanāt\* (|)

これは『俱舍論』第1章第9偈に対する註釈文の一部である。ヴァイシェーシカ説およびサーンキヤ (Kāpila) 説が言及された直後のアンダーラインを付した箇所注目していただきたい。訳すと「(しかしマナスは三つのグナを持たない)と『集量論 (Pramānasamuccaya)』に対する〔私の〕註釈 (upaniḥbandha) より知るべきである。その〔註釈の〕中に詳細に説かれているからである。しかし、ここ (真実義) では、文章が長くなることを恐れて説かない」となるが、これと全く同じ構造の一文がヴァスバンドウの『唯識三十論 (Triṃśikā)』第19偈に対する同じスティラマティの註釈の中でも見られる。そこでスティラマティは相当量の文章を費やしてアーラヤ識の存在論証を行っているが、その末尾には「なお詳しい考察は〔私の〕五蘊論の註釈 (Pañcaskandhaka-upaniḥbandha) より知るべきである」と記して<sup>39</sup>、詳細をスティラマティ自身の五蘊論註釈書に譲っている。無論『五蘊論』の註釈ではこれに対応する部分がはっきりと認められる<sup>40</sup>。ここでも「註釈」を意味する語が upaniḥbandha で示され、文章の構造も真実義の文章と同じである。これは、スティラマティ自身が、その後失われはしたが、ディグナーガの『集量論』に対する註釈も著しており、そのタイトルをあげて言及している可能性が高いように思われる。『中論』にも註釈書を著したスティラマティのことである。彼

38. 写本 -adanya- を訂正した。

39. vistaravicāras tu pañcaskandhakopaniḥbandhād veditavyaḥ (Triṃśikā-bhāṣya, Lévi ed., p. 39, ll. 3-4). cf. Buescher 2007, p. 120.

40. 松田 2010a はこの部分の翻訳である。同197頁参照。またここで述べる『集量論』の情報についても同198頁で簡単に触れた。



が『集量論』に対する註釈書 *Pramāṇasamuccaya-upanibandha* を書いてたとしても何らおかしくはないであろう<sup>41</sup>。

### 俱舎論註釈書のカトマンドゥ断簡

かつて筆者は、カトマンドゥの国立公文書館 (National Archives) が所蔵する梵文写本の中で、セシル・ベンドール (Cecil Bendall) が調査した、10世紀前に遡る貝葉写本グループ (Bendall's Puka) から『俱舎論』第1章第10偈d-11偈に対する未知の註釈書断簡1葉を発見して紹介したことがある<sup>42</sup>。2005年に筆者が小谷教授から真実義写本の写真を見せられた時、書体と貝葉のフォーマットがカトマンドゥの断簡とあまりにも似ていたため、一瞬それが未知の註釈書断簡であったことを忘れて、真実義写本の1葉が抜き出されて、チベットに行かずにカトマンドゥに止まったのではないかとさえ誤解したほどであった。カトマンドゥの断簡は、ヤショーミトラ疏に比べると、その内容ははるかに真実義と似ていたが、全同ではなく、それよりも短いものであった。さらに真実義の簡略版とさえ言える満増 (\*Pūrṇavardhana) 疏とも異なっていた。当時は真実義と満増疏のチベット語訳を参照しつつ、不鮮明なマイクロフィルムの焼き付けを読んだだけであったが、研究会では、真実義の平行箇所をすでに読み終わっているため、今あらためてカトマンドゥの断簡を見直すと、筆者のローマ字転写には誤りも多い。ここで真実義写本に対する新たな理解を前提に、改めて第10偈dの「11種の感触」の中から、その第9項「冷たさ (*śīta*)」をめぐる各註釈の解釈をサンプルとして取り上げてみたい。これはカトマンドゥ断簡の冒頭部にあたる。

(1) 俱舎論 (*Bhāṣya*) 本文 (Pradan 1967, p. 7, 10) *śītam uṣṇābhilāṣakṛt* | (11種の感触のうち) 冷たさとは暖かさに対する欲求をなすもの。

(2) ヤショーミトラ疏 (Wogihara 1932-1936, p. 27, ll. 18-20) *śītam uṣṇābhilāṣakṛd iti sambhavam praty evam ucyate. yo dharma uṣṇābhilāṣam kuryāt tac chītam*

---

41. なお「マナスは三つのグナを持たない (*manas tu na triguṇam*)」という一文であるが、対応するチベット語訳では否定詞は訳されていない (P. ed., To 51b2-3)。写本がチベット語訳のいずれかに混乱があると思われる。筆者自身はこのような議論の専門家ではないので、『集量論』のいづこにこのような議論が現れるのかも含めて、数名の方に伺ったが、いずれも不明との返事であった。この一文について、何かお気づきの点があれば是非御教授願いたい。

42. 松田 2000.

nāmopādāyarūpaṃ. grīṣme yady api tan na kuryāt tājñātyatvāt tu śītam eva tad avagantavyaṃ. 「冷たさとは暖かさに対する欲求をなすもの」とは、可能性に対してこのように説かれる。暖かさに対する欲求を為す〔可能性のある〕ダルマが「冷たさ」という所造色である。もし夏に、それを為さなくても、それと同類のものであるから、それが「冷たさ」に他ならないと理解すべし。

(3) カトマンドゥ断簡 (r1-2) *śītam uṣṇābhilāṣakṛd iti katham grīṣme śītam uṣṇābhilāṣakṛc charadi vā śītam uṣṇābhilāṣakṛd iti kr. .. tu sarvathā tājñ(ā)t(ī)yasyā .. .rāmi tad eva lakṣaṇam (|) tad api hi kālapatitam uṣṇābhilāṣaṃ kuryād iti (|) [śy]āyate tad iti śītam (|) anugrāhakopaghāta(ka)[tv]āyāśu gamya(r2)(ta ity arthaḥ |)*

(4) 真実義 (Bundle A, 19v1-2) *śītam uṣṇābhilāṣakṛd iti yadabhyāhatasyoṣṇābhilāṣo bhavati (|) śyāyate tad iti śītam (|) upaghātānugrāhakatvād āśu gamyata ity arthaḥ (|) nanu ca grīṣme śaradi ca saty api śīta uṣṇābhilāṣo na bhavati (|) uṣṇābhilāṣasyānyathābhāvāt\* śītam evoṣṇābhilāṣakṛd ity avadhārya-(v2)te (|) evaṃ vā tatkāryam api tājñātyatvāl lakṣyate lākṣaṇikaiḥ (|)*

「冷たさとは暖かさに対する欲求をなすもの」とは、それ（冷たさ）に打ちのめされている人には暖かさに対する欲求がある。冷たさ（śīta）は śyā IV（凍らせる）の派生語。〔冷たさには〕害と益があるから直ちに認識されるという意味。では夏と秋では、冷たさがあっても、暖かさに対する欲求はないのではないか。暖かさに対する欲求は〔冷たさ〕別にはありえないから、冷たさこそが暖かさに対する欲求をなすものであると決定される。同様に、その結果も、それと同類であるから〔と〕定義を与える人たち（毘婆沙師たち）によって示されている。

写真の状態が悪く、カトマンドゥ断簡にはなお読み切れない箇所が多く含まれるため、現時点で断簡の和訳はできないが、ローマ字転写を見ていただければ、真実義との同文が多く含まれていることが理解できるはずである<sup>43</sup>。ヤショーミトラ疏とも一部の単語は一致するが真実義ほどではない。今後は、真実義の梵文テキストと比較して、カトマンドゥ断簡を全面的に見直す必要がある。ここに挙げたのは1項目だけであるが、他の項でも真実義との文章の一致は多い。しかし何度も言うが両者は同一の註釈ではない。単なる推測に過ぎないが、以前は、ヤショーミトラ疏が帰敬偈で言及するグナマティあるいはヴァスミトラの註釈書の断簡が現れたのではないかと考えたのであった。真実義ウイグル

43. 同じスティラマティの五蘊論註釈書でも、「冷たさ」について真実義と同様の説明が現れる。yadabhyāhatasyoṣṇābhilāṣo bhavati tac chītam. nanu ca grīṣme śaradi ca saty api śīta uṣṇābhilāṣo na bhavati. uṣṇābhilāṣasyānyathābhāvāt, śītam evoṣṇābhilāṣakṛd ity avadhāryate. evaṃ ca tatkāryam api tājñātyatvāl lakṣyate lākṣaṇikaiḥ. Kramer forthcoming B より引用。

語訳の帰敬偈が正しければ、スティラマティの師はグナマティである。単なる1葉の断簡にすぎないが、カトマンドゥ断簡の後半は、常に問題になる第1章第11偈の無表 (avijñapti) の定義の項を含んおり、新たな視点から見直した場合、重要な情報を提供してくれることになるかもしれない。

以上、真実義写本をめぐって大谷大学における研究会の現状と、多少新たに判明した点を周辺情報と共に述べた。第1章の註釈を読み終えた時点で校訂テキストを整え、蔵学中心とオーストリア科学アカデミーとの間の共同研究の成果に組み入れられて、*STTAR Series* の一冊 (真実義第1巻) として出版されることになるはずである。ただ、筆者の見るところ、それに至るまでにはなお数年の時間が必要である。況や残された真実義写本全体の出版となると。予想のできないことゆえ、今日これ以上書くことは止めておきたい。

[付記] 本稿は、昨年9月26日、北海道大学における集中講義の機会に行われた公開講演会で話した内容に、その後入手した周辺情報を付け加えたものである。集中講義、講演会、本誌掲載にあたってお世話いただいた同大学の細田典明教授および林寺正俊准教授に御礼申し上げます。2013年4月30日(2013年7月31日最終稿受領)

[梵文写本目録]

- (1) 『民族図書館蔵梵文貝葉經目録』(1985) 通称「王森目録 (*Wang Sen Catalogue*)」*Indica et Tibetica*, No. 47 (2006), pp. 297-334.
- (2) 『西藏自治区現存梵文写本目録』(1985) 通称「罗焯目録 (*Luo Zhao Catalogue*)」未出版
- (3) 『中国蔵学研究中心収蔵的梵文貝葉經目録』(1987) 通称「桑徳目録 (*Sang De Catalogue*)」未出版

王森目録は、北京の民族図書館に1960年代から一時的に移されていたシャルの僧院旧蔵写本を中心とする約250点の写本目録。写本の現物は現在ラサのチベット博物館に返還されている。罗焯目録は1985年時点でラサの梵文写本をほぼ網羅した目録。桑徳目録は罗焯目録所載の写本から約650点を選んで撮影された写真(蔵学中心所蔵)に対する目録。(1)は出版されているが、(2)と(3)は未出版である。現在は原稿の複写の形で回覧されているようである。

[参考文献]

江島恵教

[1986] 「スティラマティの『俱舎論』註とその周辺—三世実有説をめぐって」『仏教学』19, 5-32. 『空と中観』(春秋社, 2003) 所収, pp. 585-613.

榎本文雄

[1988] 「Abhidharmadīpa のトルファン出土写本断片」『印度学仏教学研究』37-1, pp.

(93)-(99).

小谷信千代, 秋本勝, 福田琢, 本庄良文, 松田和信, 箕浦暁雄

[2009] 「新出梵本『俱舍論安慧疏』(界品) 試訳」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』26, pp. 21-28.

[2012] 「新出梵本『俱舍論安慧疏』(界品) 試訳 (2)」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』29, pp. 1-32.

櫻部 建

[1975] 「アビダルマ論書雑記一、二 (1-3)」『三蔵集』3, pp. 89-107.

[1997] 「『入阿毘達磨論』(チベット文よりの和訳)」『増補佛教語の研究』 pp.184-241.

庄垣内正弘

[2008] 『ウイグル文アビダルマ論書の文献学的研究』松香堂, 750 pp.

蘇 軍

[1995] 「阿毘達磨俱舍論實義疏」『蔵外佛教文献』(宗教文化出版社、北京) pp. 169-250.

広瀬智一

[1983] 「Abhidharmadīpa 年代考」『印度学仏教学研究』31-2, pp. (94) - (99).

松田和信

[2000] 「俱舍論 (I.10d-11) に対する未知の註釈書断簡備忘」『佛教大学総合研究所紀要』7, pp. 105-114.

[2008] (翻訳) 「チベット自治区に保存された梵文写本の目録編纂—その二十有余年の紆余曲折—」罗焯 Luo Zhao 原著『仏教学セミナー』88, pp. (25) - (36).

[2010a] 「五蘊論ステイラマティ疏に見られるアーラヤ識の存在論証」『インド論理学研究』1, pp. 195-211.

[2010b] 「中央アジアの仏教写本」『文明・文化の交差点』『新アジア仏教史』第5巻、pp. 119-158.

[2011] “〔附〕中国チベット自治区のサンスクリット語写本” 「アフガニスタン写本からみた大乘仏教」『大乘仏教とは何か』『シリーズ大乘仏教』第1巻、pp. 175-180.

松濤泰雄

[1995] 「Tattvārthā (VII) —冒頭部の解釈をめぐって—」『梵語仏教文献の研究』(山喜房仏書林) pp. 171-198.

三友健容

[2007] 『アビダルマディーパの研究』(平楽寺書店) pp. xxviii+1130.

箕浦暁雄

[2010] 「ステイラマティ『俱舍論實義疏』梵文写本解読の現況」(小谷信千代他「梵文写本研究の現状と課題」所収) 『印度学仏教学研究』58-2, pp. (256) - (257) .

宮下晴輝

- [1991] 『クシャーナ時代におけるアビダルマ教義学形成の研究—TATTVĀRTHĀ と LAKṢAṆĀNUSĀRIṆĪ の比較研究—』(平成2年度科学研究費補助金 一般研究C 研究成果報告書) 38+38 pp.

吉本信行

- [1982] 『アビダルマ思想』(法蔵館) pp. 383+22.

Buescher, Hartmut

- [2007] *Sthiramati's Trīmśikāvijñaptibhāṣya, Critical Editions of the Sanskrit Text and its Tibetan Translation*, Wien, xviii+157 pp.

Jaini, P.S.

- [1959] *Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāvṛtti*, Tibetan Sanskrit Works Series, Vol. 4, 144+499 pp.

Kramer, Jowita

- [2008] "On Sthiramati's Pañcaskandhakavibhāṣā: A Preliminary Survey", *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Saṃbhāṣā*, No. 27, pp. 149-171.

- [2012] "Descriptions of “Feeling” (vedanā), “Ideation” (saṃjñā), and “the Unconditioned” (asaṃskṛta) in Vasubandhu’s Pañcaskandhaka and Sthiramati’s Pañcaskandhakavibhāṣā”, *Rocznik Orientalistyczny*, T. LXV, Z. 1, 2012, pp. 120-139.

- [2013] "A Study of the Saṃskāra Section of Vasubandhu's Pañcaskandhaka with Reference to Its Commentary by Sthiramati", *The Foundation for Yoga Practitioners* (see note 1), pp. 986-1035.

- [forthcoming A] “Indian Abhidharma Literature in Tibet: The Section on Vijñāna in Sthiramati’s Pañcaskandhakavibhāṣā” *Proceedings of the Conference “Buddhism Across Asia: Networks of Material, Intellectual and Cultural Exchange,” (Singapore 2009)*, Tansen Sen (ed.), Institute of Southeast Asian Studies.

- [forthcoming B] *Sthiramati’s Pañcaskandhakavibhāṣā*, Part I: Critical Edition, Part II: Diplomatic Edition, Beijing/Vienna: China Tibetology Publishing House/Austrian Academy of Sciences Press.

Krasser, Helmut

- [2013] "Indic Buddhist Manuscripts in Vienna: A Sino-Austrian Co-operative Project with Methodological Remarks on Śāstric Urtexts", *From Birch Bark to Digital Data: Recent Advance in Buddhist Manuscript Reserch, Papers Presented at the Conference Indic Buddhist Manuscripts: The State of the Field Stanford, June 15–19 2009*, eds. by Paul Harrison and Jens-Uwe Hartmann, Wien (forthcoming) .

Lévi, Sylvain

[1925] *Vijñaptimātratāsiddhi*, Paris, xvi+45 pp.

Li Xuezhū (李学竹)

[2012a] "Madhyamkāvatāra-kārikā", *China Tibetology*, No. 1, 2012 (General No.18) , pp. 1-16.

[2012b] "Further Folios from the Abhidharmadīpavṛtti Manuscript", *China Tibetology*, No. 2, 2012 (General No.19) , pp. 1-7.

[2012c] 「Abhidharmasamuccayavyākhyā の序文について」『インド学チベット学研究』 No. 16, pp. 1-7.

[2013] "Diplomatic Transcription of Newly Available Leaves from Asaṅga's *Abhidharmasamuccaya* —Folios 1, 15, 18, 20, 23, 24—", *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddgology at Soka University*, Vol. 16 (Academic Year 2012) , pp. 241-253.

Luo Hong

[2013] "Sanskrit Manuscript Projects in the China Tibetology Research Center", included in the same forthcoming book as Krasser 2013.

Matsuda, Kazunobu

[1996] *Two Sanskrit Manuscripts of the Daśabhūmikasūtra Preserved at the National Archives, Kathmandu*, Tokyo, xxix + 108 plates.

Pradhan, P.

[1967] *Abhidharma-Kośabhāṣya of Vasubandhu*, *Tibetan Sanskrit Works Series*, Vol. 8, vii+479 pp.

Saerji

[2013] "Indic Buddhist Manuscripts in the People's Republic of China: The Peking University Project", included in the same forthcoming book as Krasser 2013.

Steinkellner, Ernst

[2004] *A Tale of Leaves - On Sanskrit Manuscripts in Tibet, their Past and their Future*, Amsterdam, 39 pp.

Steinkellner, Ernst (ed.) in Cooperation with Duan Qing and Krasser, Helmut

[2009] *Sanskrit Manuscripts in China, Proceedings of a Panel at the 2008 Beijing Seminar on Tibetan Studies, October 13 to 17*, China Tibetology Publishing House, Beijing, 339 pp.

Wogihara, U.

[1932-1936] *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā*, Tokyo.